
彼岸花の恋歌

桜田 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼岸花の恋歌

【Nコード】

N1362Y

【作者名】

桜田 零

【あらすじ】

高校の屋上から友人に落とされた少女。

次に気づいた時は異世界だった。

ラノベは好きだったし、二つ年上の兄はゲーマーだったから、なんとなくは受け入れられる。

受け入れられるけど、私って一体誰だったけ？

自分の名前を忘れた少女と偶然丘に立ち寄った青年は自分たちの運命も知らず出会ってしまい…

（作者のノリで連載したので更新は不定期になると思います。）

プロローグ（前書き）

恋愛書くのが苦手な作者が気まぐれで書いたので、あんまり期待しないで下さい。

自分がいた世界とは違うことには気づいた。気づいたのは良いのだが、違和感を感じていた。

『……私は、誰？』

第一話 大切なモノを忘れました。(前書き)

一話目のクセに短いです。

本編から、大方主人公視点だと思えます。

第一話 大切なモノを忘れました。

『ここ、何処なの？』

気がついたら知らない場所にいた。白い花が咲き乱れている丘みたいな所。潮の匂いもする事からどうも海の近くみたい。

どうして此処に居るのかを整理するためにこれまでの事を思い出してみた。

『えっと、昼休みに遙達と屋上に行つて…ああ、そうだ！遙が大切にしていたヘアピンを取ろうとして柵を越えたんだ。越えた直後に遙に押されて……。』

だんだんと思い出してくると同時に、怒りがこみ上げて来た。握り拳が固くなる。

ただどすく、解いた。今は目の前に遙が居るわけじゃないし、多分あの時に私の人生は終わっていると思う…。

とりあえず、此処は学校じゃないので、どこにいるのか辺りを見回してみた。

最初は天国だと思っていたけれど、あまりにも感じるモノ全てがリアルだからきつと違うような気がする。でも、日本にはこんな綺麗な所があるなんて聞いたことがない。有り得ないかもしれないけど、この状況でこの選択肢が一番合っているとオタク知識が言っ

いる。

――異世界トリップ

携帯小説やラノベによくあるあれだ。モブだった私がまさかかって思ったけど、実際に見ているのは学校でも、ましてや日本でもない知らない風景。これじゃあ、認めざるおえないよね…。

普通の人だったらきつと、今頃途方に暮れているに違いないと思うけど、ラノベ大好きだったし、二つ年上の兄がゲーマーだったから「異世界トリップバチコイ！」なんだよねえ。自分で言うのもなんだけど、こんなに簡単に受け入れても良いのかな？

此処を離れて今いる所がどんな所なのか知りたくて、地面から立つとある違和感に気づいた。

小さい頃からの私の記憶はある。背中まで伸ばした髪だってちゃんと黒いままだし。私が着ているのは高校の制服のまま。

変わった所なんて一つもない。私は私のままだもん！

ってあれ？いつもなら「だもん！」っていつつも自分の名前入ってたよね？そういえば…

『――私は、誰？』

どうやら、元の世界に自分の名前を置いて来たらしいです……………。

第一話 大切なモノを忘れました。(後書き)

漢字ミスなどのご指摘がありましたらお願いします。

あと、検索ワードの「異世界転生」を「異世界トリップ」に訂正させて頂きました。

第二話 赤毛の傭兵に出会いました。(前書き)

11 / 14 一文足しました。

第二話 赤毛の傭兵に出会いました。

名前を忘れたことになりのショックを受けて花が咲いた丘に立ちずくんできた。

秋生まれの私に父がつけてくれた名前。母や兄が愛情を込めて呼んでくれた大好きな自分の名前をいとも簡単に忘れてしまったことに凄くショックを受けた。

『父さん、母さん、兄さん……ごめんね……ごめんなさい……』

視界が一気に滲んでいった。目尻から私の体温と同じくらいの水が頬を濡らしていった。

|||||

一体どれだけ泣いていたんだろう？ 落ち着いた時には辺りは薄暗くなっていた。

とりあえず、街の方まで出ようと思った。こんな所においても何も始まらないし飢え死にしちやいそう！

決断からの行動は案外早いもので、道のある方へ歩き出した……
……… かったのにい。

すっかり異世界だつてこと忘れてた！
私の前に魔物が飛び出して来たんです。
狼みたいだけど…何か少し小さい？ でも口から見える牙は見た目に合わず鋭い。

狙いはもちろん……どう見ても私のようです。 orz

一方の私は当然丸腰。そもそも、武器とか持ってたら銃刀法違反で今頃刑務所だよ！私だって平凡な日本人女子校生だからね！オロオロしていると狼君（可愛いし、名前なんて知らないの。）がこちらに向かって飛び出して来た。

トリップ早々殺されるなんて思ってたなかった。もう駄目と思ってぎゅっと目を瞑った。

ザーザシュッ！！

何かが切れる音がして、思わず目を開けてしまった。

飛びかかって来ていた筈の狼君は鮮やかな赤い液体を撒き散らしながら倒れていて、その後ろにその原因と思われる

「大丈夫か？怪我は…？」

綺麗な赤毛の青年が立っていた。

青年は、私より頭一つ分くらい背が高い。腰ぐらいまで伸ばしていると思われる赤毛の髪はうなじの所で一つに結ってある。瞳は…

…エメラルドを思わせるような深い翠。感じはまんま西洋系で…
…。

「本当に大丈夫か？もしかして具合悪いのか？」

「大丈夫です！ごめんなさい」

つい、彼の容姿に見とれてしまった。ああ、恥ずかしい！

彼のテノールの優しそうな声に我に返って慌ててしまって、やっと返事をした有り様だ。

「何故こんな所に一人で居るんだ？それはさておき、きつと家は近くだからそこまで送ってやるよ」

「……………」

彼から少し視線を外した。

申し出は嬉しかったけれど、今の私に帰る場所なんてない。そんなことを言ったら、此処にいる理由を絶対聞かれると思う。それに名前も…。

正直、この人に言っただけの良いのか不安だった。

「どうしたんだ？家が分からないのか？」

彼の声からして少し焦っているみたい。

話さない事には何にも始まらないので、とりあえず馬鹿にされるの前提でぶっちゃける事にした。

「帰る家は無いんです」

彼を真っ直ぐに見て言う。案の定、彼は不思議そうな顔をした。そんなのお構いなしとでも言うように私はそのまま話し続ける。

「今から言う事は事実ですが、信じる信じないは貴方次第です。私はこの世界の人間ではありません。事故に遭遇して、気を失ってる間にこの世界に來ました。なので、此処が何処なのかとか、この世界での常識とか、その外色々な事を私は知りません。なので私に帰る所なんて……無いんです」

本当は事故じゃなくて遙に落とされたただけだね。自分で言っておきながら何だか悲しくなってきた。

恐る恐る彼の表情を見ると、凄く悩んでいるような顔をしてた。しばらく考えて彼が口を開く。

「確認するけど、帰る場所がねーんだよな？」

「は、はい……」

「なら、安定した生活ができるようになるまで俺と来ねえか？」

私は目を見開いた。だって馬鹿にされると思ってたんだもん！

「あーやっぱり、俺みたいな傭兵といるのは嫌か？」

「そんなことありません！宜しくお願いします！！」

嬉しくてとびつきりの笑顔で笑うと彼は少し視線をずらしたよ
うな気がした。

第二話 赤毛の傭兵に出会いました。(後書き)

やっとキーキャラクター出て来ました。

お気に入り登録して下さった方、本当に感謝×2です！()
感想などお持ちしております！

第三話 俺は黒髪の少女に出会った。(青年side)(前書き)

二話を青年サイドでお贈りします！

第三話 俺は黒髪の少女に出会った。(青年 side)

あれは昼過ぎだったと思う。依頼を達成して、依頼があったファ
ージの街に戻ろうとした時だった。

昼間だと言つのに白に近い黄色い流星が流れ落ちていたのを俺は
確かに見ていた。いや、厳密には流星じゃなくて何かの魔法の発信
源だと思う。

ほっとけば良いものを不信に思った俺は、結局流星の収束地点に
向かって走り出していた。

余計な事に首突っ込んで最後の最後で痛い目に合うのは分かりき
っている事なのにこの時だけは行かすにはいられなかった。

|||||

そのまま流星を追っていると、とある花畑に向かっていることが
分かった。

あそこは、沢山の種類のリコリスが咲く事で有名な場所だ。確か
この時期はナツズイセンという薄桃色のリコリスが咲いていたと思
う。

そんなことを考えながら目的地に向かって走り続けた。

この調子だと日が沈む前に着くと思う。

|||||

リコリス畑の入口に差し掛かった所だった。

草むらからウルフの幼体が出て来て花畑の方へ向かって行ったのを見た。そこまでは何とも無いと思っていたが、さっきから俺の第六感が警告を促しているような気がしたから急いでそのウルフの幼体を追いかけた。

案の定、あと少しでウルフの幼体の餌食にされる奴が出るところだった。

獲物に飛びかかったウルフの幼体を居合い切りで切り捨てた。

血飛沫を上げて倒れ行くウルフの幼体の餌食を見た途端、俺は絶句した。

――そこに立っていたのは、少し幼さが残った神秘的な少女だったのだから。

背中まで伸びた漆黒の髪に、光加減によつては亜麻色に見える黒い瞳。見たことも無い服からはあまり体型が分からないが、きつと華奢な体をしているのだと思う。

おっと、彼女の容姿に見とれて話しかけるのを忘れる所だった。

第三話 俺は黒髪の少女に出会った。(青年side)(後書き)

長かったので切りました。

1作目が不調だったせいか、検索数を見てビックリしました！皆さんに読んで頂いて本当に感謝しきれません）、）、（

お気に入り登録してくださった方々、本当にありがとうございます

(T^T)

第四話 俺は少女を連れて行くことにした(青年side)(前書き)

三話の続きです。

第四話 俺は少女を連れて行くことにした(青年side)

「大丈夫か？怪我は…？」

とりあえず何処にも怪我は無いか聞いてみる。が、返事が無い。まさか、彼女の目の前で魔物を切った事に対して気分が悪くなったとか！？

心配になってもう一度聞いてみる。

「本当に大丈夫か？もしかして具合悪いのか？」

「大丈夫です！ごめんなさい」

彼女はやっと返事をしてくれた。容姿どうりって言って良いのか声もまた可愛らしい。

どうやら、彼女に怪我は無いようで少し安心した。が、まだ早いと思う。何故なら彼女を家まで送り届けねばならないからだ。

「何故こんな所に一人で居るんだ？それはさておき、きっと家は近くだからそこまで送ってやるよ」

「……………」

彼女は俺から視線を外して悲しそうな顔をした。

数分たって何かを決意すると俺に向き直って真面目な視線で話し出した。

「帰る家は無いんです」

俺は不思議に思った。服の質からしてそれなりに裕福そうなのに少女に帰る家が無いなんて考えられないからだ。

俺が不思議に思う事は想定内だったのか、彼女は話し続ける。

「今から言う事は事実ですが、信じる信じないは貴方次第です。私はこの世界の人間ではありません。事故に遭遇して、気を失ってる間にこの世界に来ました。なので、此処が何処なのかとか、この世界での常識とか、その外色々な事を私は知りません。なので私に帰る場所なんて……無いんです」

そう言っている彼女の顔は何処か寂しそうだった。

『なんとかしてやりたい』

考えられるだけ考えて、ある案を出していた。

「確認するけど、帰る場所がねーんだよな？」

「は、はい……」

「なら、安定した生活ができるようになるまで俺と来ねえか？」

彼女は目を見開いた……がそれ以上に俺自身が驚いていた。

近くの街の修道院にでも連れていけばきつと面倒を見てもらえろと思うのじ。

この時、俺は彼女に一目惚れした事に気づいていなかった。

「あーやっぱり、俺みたいな傭兵といるのは嫌か？」

「そんなことありません！宜しくお願いします！！」

その時見た彼女の笑顔が眩しくて目を背けたのと同時に、心臓が跳ねた理由を俺はこの時知る術が無かった。

第四話 俺は少女を連れて行くことにした(青年side)(後書き)

二話に書き忘れましたが感想などお持ちします。

第五話 新しい名前をもらいました。(前書き)

区切ろうかと思ったのですが、切れ目が無さそうなので結構長くなり
ました…………orz

第五話 新しい名前をもらいました。

彼は何かを思い出したように私に向き直って話しをきりだした。

「そういえば、まだ名乗って無かったな。俺はラグ。今此処にいるアグシリア大陸の王国レストの傭兵だ。で、お前は？」

やっぱり聞かれました！私、自分の名前が思い出せそうにないです。本当に困りました。orz

私が困っているのを見て、彼…ラグさんはまた心配そうな顔をした。

「どうしたんだ？本名名乗るのが嫌なら偽名名乗ったって良いんだぜ？」

「えっと……」

本当に困った。「名前、忘れちゃいました てへっ」「なんて言った矢先には、変な奴には近づくなつて絶対見捨てられる……。うわああああ！！嫌っ！！パス！！それだけは勘弁！！こんな所で飢え死にだけは御免よ！！」

「クスツ…アハハハハハ……！！」

自分のオーバーな考えに浸っていたらいきなりラグさんに笑われてしまった。それもかなり豪快に……。

「な、何笑ってるんですかラグさん！？」

怒った私は兄と喧嘩するときのように自分の顔をラグさんの顔に

近づけた。

ラグさんは驚いたのと同時に顔を少し赤くして目を私から反らした。

『あ、あれ？勝っちゃった？』

兄と違う反応を示して少しやりすぎた事を反省する。

視線を反らしたままでラグさんが言った。

「あー、その…、笑って悪かったな。お前の百面相がスゲー面白くて…」

「こちらこそ、怒り方キツくてすみませんでした。……………私の顔が原因か。何か凹むなあ」

最後の独り言は聞こえなかったらしく少し安心した。

「で、お前の名前は？」

どわあああ！！ラグさん、話を戻さないで！！

これ以上は変な顔を見られたくないので結局白状する事にした。

「此処に来た衝撃が何かで名前忘れたんですけど……………」

ラグさんは目を見開いていた。やっぱり変人扱いされるう！！

「そうか…。家や知り合いだけじゃなくて名前まで…」

「ほえ？」

何だか知らないけど、同情を買ってしまいました。……………うん、これを期にすぐネガティブになるの止めよう。

そんな事を考えていたらラグさんが口をきった。

「……………リコリス」

「えっ？」

「リコリス、お前の名前だよ。名前忘れたんだろ？だったら俺が付けたって構わないよな？名前無いと困る事も多いと思っし……………駄目か？」

ラグさんは少し不安が混じった笑顔を向けてくるけど、私は凄く嬉しかった。

私の名前を考えてくれたし、リコリスは秋生まれの私にぴったりだったから。

リコリス…ヒガンバナ科ヒガンバナ属の総称のことでもちろん彼岸花もこの中に入る。そういえば、此処の花はなんとなく夏水仙に似てるような気がする。

私は笑って答える。

「いいえ！嫌じゃ無いです！むしろ凄く気に入りました」

「そうか、良かった」

そう言っただラグさんも笑ってくれた。今頃だけど、美男イケメンの笑顔って凶器だよ！！絶対！！

「それじゃあ改めて、宜しくな！リコリス。それと、これから長い付き合いになると思っから、さん付けも敬語も無しで」

「うん！！宜しくね、ラグ！」

その後、私はラグに連れられて、近くの街に向かった。

第六話 街に着きました。

目的地のファージという街に着いたのは真夜中だった。

真夜中って聞くと同年代の某アイドルグループのあの曲とか、某忍者少年のアニメのエンディングとかを思い出す。JPOPが好きだった私は、つい数時間前のことなのに思い出しただけで郷愁にかられていた。

そんな顔をしていたのか、ラグが心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫、大丈夫！ちょっと馴れない所来て今後一人になった時大丈夫か心配になっただけだから！」

「本当か？それともうそんな先のこと考えてんのか？当分はそんなことねえからもつと気楽にいけよ」

何だか見透かされてる気もするけど、それ以上に呆れられてるよ
うな気がする。

|||||

宿の受け付けを済ませたラグが私の所へ戻って来た。二つ持っている鍵のうちの一つを私に渡して、部屋まで連れて行ってくれた。ラグは隣の部屋にいるらしい。

今日は色々あったから凄く疲れてたみたい。せめてブレザーぐらい脱げば良いものをベッドにダイブした瞬間に寝てしまった。

いう所が可愛いよな」

そう言っただけ私の頭を撫でるラグ。昔よく兄がやってくれていたそれは何だか心地良かった。

「うん、十二歳くらいの妹がいるっていうのも何か良いかもな」
「へ！？」

ラグの発言に驚いた。今、十二って言ったよね？あれ？まさかとは思っけど…………。

「ねえラグ、私って何歳に見える？」
「え、十二だろ？」

うん、やっぱりそうだ。間違われてる。あ、でも反応面白そう！

「私、十七だよ」
「えっ……………」

はい、凄くあっけらかんとした顔をしました。

……………「こりゃ、誤解を解くのが大変そうです。」

第七話 街で買い物中です。(前書き)

一話一話が段々長くなってるような...

第七話 街で買い物中です。

あれから、なんとか誤解は解けた訳なんだけど……………。

「リコリスが三歳年下だなんて…。まあ、妹分ができた事には変わりねえか」

なんて言っただけは一人で何か納得してた。とりあえず私は妹分決定らしい。二つ上だろうが三つ上だろうが兄がいた私にしてみればあんまり変わらないような気がするのはいかんな？

そんなことを考えてため息をつくとなら私の手をいきなり掴んだかと思うとそのまま私を引っ張って走り出した。

「リコリス、次は武器屋に行こうぜ！俺について来るんだ、何か護身用に持ってた方が安心だろ？」

「分かった、分かったけど走る必要無いじゃない！」

楽しそうな嬉しそうな顔をしたラグはどこか子供っぽく見える。

これじゃあ、私がお姉ちゃんみたいじゃないかって突っ込んでやりたかったけど、ラグの様子からして聞いてくれそうになかったから、心の内にそつと秘めておいた。

走っていて思うんだけど、私未だにローファーだよ！まずそつちをどうにかして欲しいよ。

またため息をついて言おうと思って立ち止まろうとしたけど、ラグの方が強くてそのまま引っ張られてしまった。

この調子だと武器を買ってからになっちゃうぞ。

|||||

うん、居心地悪い。日本人には全く縁のない場所だから、正直早くこんな所出たかった。

そんな私にはお構いなしにラグはあれはこれとは武器を持って来る。

「リコリス、レイピアなら軽いからお前がも扱えるだろ？」

「ごめん、私フェンシングなんてやった事無いから……」

「じゃあ、スローナイフ……」

「ダーツで真ん中になんてろくに当てた事無いし……」

かれこれ一時間ずっとこんな感じだった。一応、中学は剣道部だったけれどあれの基本は刀だし、この世界にはないと思う。

で、結局私が選んだのはサーベル。そんなに重くないし、基本的な所は長剣とさほど変わらないみたい。片手で扱うっていうのが問題だけど、馴ればなんとかなると思う。

「本当にそれで良いのか？他に扱いやすいのあ「これで良いの！！」

ラグが言い終わる前に言ってやりました。このぐらいの我が儘なら大丈夫だよな？何だか店に入った途端、ラグが心配性になったよな気がする。

納得のいかない顔をしながらもラグは会計を済ませて買ったサーベルを私に渡してくれた。

受け取った後、来るときに思った事をねだってみる。

「ラグ、靴と下着欲しいんだけど……」

そういうとラグはしまったというような顔をした。ああ、やっぱりそこらへんの大事な事忘れてたんだ…。

その後、ラグに連れられて下着と靴（もちろん、ラグには外で待ってもらった）を買った。

そういえば、宿代含めてラグにお金出して貰ってばかりだったけれど、ちゃんと返さないとまずいよね。

「ねえラグ、お金出して貰ってばかりだけど返すの遅くなくてもいい？私お金持っていないから」

不安にラグを見上げる私にちよつと赤面して視線をずらしたラグはそんな私の頭を撫でた。

「き、気にすんなつっただる。俺自身そんな使わねーから困る事ねえし、お前がこつちで生活できるまで俺は面倒みるつもりだから」

ラグはそこまで考えてくれてたんだ。それが嬉しかった半面申し訳なかった。

「ラグ、ありがとう」

「いいってことよ。さあ、帰ろうぜ」

笑って頷くと、ラグは私の手を取って宿へと歩き出した。

第八話 俺の妹分…だよな？(ラグside)(前書き)

三回目のラグ君サイドです！

第八話 俺の妹分：だよな？（ラグside）

リコリスを保護してからずっとこんな調子だった。アイツの表情一つで焦ったり、嬉しくなったり……まるで俺が俺でなくなっただけだった。

リコリスの生活用品を買い揃えて宿に戻る途中、一瞬だけリコリスを見る。十七だと言われたがやはり実年齢よりも幼く見える。リコリスが言うには、彼女の身長は平均はあるらしいから、彼女の世界の人間の身長が伺えてしまう。

「ラグ、宿見えてきたよ！」

そう言って繋いでいた手を離して宿の方へと走って行く。見た目もそうだがその行動もどこか幼く見える原因かもしれないな。

「ラグー！！早く早く」

「ああ、今行くから待ってる！」

無邪気に笑う彼女が可愛いくて仕方がなかった。俺自身妹も弟もいたけれど、いつつもいがみ合っていたような気がする。

『きっと俺はこんな妹が欲しかったのかもしれない』

そう思い込んで上手く丸め込んだものの、やはりと言うべきか腑に落ちない所があった。

何故、リコリスの笑顔を見る度に心臓が跳ねるのか。何故、リコリスの行動で俺の顔が熱くなるのか。何故、

う。きつとりコリスは此処よりも大きな街を見たらきつとはしゃぐと思う。想像するだけでも心が弾んだ。

でも、上手く逃げ切れるのか？王都はあの人がいる所だ。見つかったら俺だけじゃなくてリコリスも何をされるか分からない。

いつの間にか、俺自身の事ではなくリコリスの安否を心配していた。

『…当たり前か。だってリコリスは俺の妹分だから』

たった一日しか一緒に過ごしていないのにリコリスを大切に思っている自分がいた。

第九話 王都に向けて出発しました。

朝起きていきなりの事だったから、急いで荷物を纏めていた。

「何よ何よ何よ！何でいきなり『あ、今日王都に行くから』って言うのよ！！昨日のうちに言えっつーの！！」

文句タラタラ言いながらも荷物を纏める手の動きが鈍くならないのはサボリ癖の酷い兄がいたからだと思う。

本当、兄さん大丈夫かなあ？家事全般はできないし、部屋に籠もって大人しいと思ったらゲームしてるし、気づいたら私のおやつ食べてるし！！

あー、やっぱりあの駄目兄貴の事考えてたらムカついてきた。今日は朝から腹がたちっぱなしなのに。

「リコリス、支度終わったか？」

はい、来ましたよ。私が朝からムカつかなきやいけない原因を作った張・本・人が！

「終わりましたけど、何か？」

「もしかして、おこっせ」当たり前です！！！！」

ラグが言い終わる前に言ってやった。そのまま立て続けに文句も言ってやる。

「だいたいねえ、今朝いきなり言うのがいけないのよ！！昨日のうちに言いに来るとか「言いに来たけど、リコリス寝てたし」五月蠅

い！だつたら起きてるときに言つてよ！私の準備が遅くなつて出るのが遅くなるでしょ！？そうなつたらできるモノもできなくなるでしょ……！」

途中口をはさまれたがマシンガンのごとく言つてやる。だつて、このぐらい言わないと絶対次もこんな感じで出るの遅くなるもん。

「いい？分かつた？」

「ハイ………」

返事をしたのは良いものの、部屋の隅っこで膝抱えてラグが落ち込んだから更に出発の時間が遅くなつたのは言つまでもないと思う。

|||||

「あ、そういえば魔法について教えて無かつたな」

「え！？この世界には魔法があるの？」

道中、ラグが思い出したように言つたセリフに思わず目が光つた。だつて魔法だよ！魔法が有るんだよ！ゲーマーや中二病なオタクなら一度は使つてみたいアレですよ！

「リコリスのいた世界には無かつたのか？」

「魔法つていう考えじたいはあつたけど、無かつたよ」

そつ言つとラグは興味深そつな顔をした。

「分かった。それじゃあ、基本的な所からな。まず、魔法を使役するには自身の魔力を消費するんだが、それは個人で差が有る。そんなでもって、魔力を多く消費することによって強力な魔法を使役することができるんだ。但し、魔法を使役し過ぎて魔力が無くなってしまつと、最悪命を落とすから気をつけてくれよ。…………と、こんな感じかな？」

ラグの説明で魔法と魔力については分かった。魔法を使い過ぎるって怖いね。

「分かった。ねえラグ、属性とかは無いの？」

「まあ、待てよ。それを今から説明するんだろ。…………属性についてだが、炎、水、地、風、雷、光、闇、無の八属性が有るんだ。そのうちの五つは炎 水 雷 地 風 炎のような感じで強弱関係がループ状になっていて、光と闇はお互いを打ち消しあう関係。無属性は有利不利は無く、相手の属性に関係なく一定の効果を使えるんだ。でも発動時間も規模も他の属性に比べて小さいっていうデメリットが有るのを忘れないで欲しい」

「うん、分かった！」

「最後に使用方法だけど、基本はイメージ。詠唱はイメージしやすくするためだから、できるなら要らないんだ」

ラグに魔法について一通り教えてもらった後、ちよつと試してみたら規模が小さいのは、一通りできた。

今度は実践でって思っていたら丁度良く魔物が出てきた。

「リコリス、実践してみるか？」

「うん！！」

私が頷くと、ラグは長剣を私はサーベルを抜いた。

第十話 トリップパーに魔法はお馴染みのようです。(前書き)

後半はシリアス&残酷描写があります。

第十話 トリップパーに魔法はお馴染みのようです。

ラグが魔物に向かって行く…と思ったら、ダラリと長剣を下げて
いる。アレ？攻撃するんじゃないの！？

「リコリス、お前一人でやってみるよ。どうせ、LV・1スライム
だし。実践には持ってこいだろ？」

や、ラグくん、それはないと思うよー。

LVで言うなら私も1だよ！いきなり一人でやれとか無理だから！

「兎に角やってみるよ！無理そうだったら俺がやるから」

そうやって背中を押されて一歩前へ出る。

ラグの様子を見ると私が攻撃するまで何もしてくれないらしい。

何だよ！どこの鬼教官だよ！私は誉められて伸びるタイプであって
いきなり無茶苦茶しても身に付かないのに。

何もしないといくらスライムでもやられてしまうので仕方無くや
る事にした。

えっと、イメージイメージ。雷の球を放つ感じで……。

「サンダーシュート！ー！」

イメージ通りの雷の球が正面に出現、発射してスライムに当たる。
魔法に当たったスライムはそのまま気絶してしまっていた。

「初めてにしては上出来だと思うぜ。後は魔力のコントロールだけ
だと思う」

そう言われて頭を撫でられる。剣ダコのできているその手に頭を撫でられるのはとても心地良かった。兄にされる時とは違う感じがしていたけれど、気にしない事になっていた。

「さて、そろそろ行くか。出るのが遅くなるとできるモノもできなくなるんだろ？」

「それ私のセリフ！！」

私とラグはじゃれあい(?)ながら王都へと向かった。

||||||||||||||||

「リコリス、下がれ！」

ラグは私を背後に隠すと自分は長剣を抜いた。

王都へ向かう途中にある森で私達の前に飛び出して来たのはゴブリンで、人型に近い姿をしているブサイクでチビな魔物だった。

ラグは相手の攻撃をステップで華麗に避けては相手の隙を狙って一閃する。

ゴブリンはその辺の魔物と違ってある程度(と言ってもサル程度)の知能が有るから攻撃がクリーンヒットし難いみたい。

それにラグ一人対ゴブリン三体は流石にキツイのではないかと心配でしようがなかった。

『私にできる事はないかな?』

そう思った瞬間、私は行動をとっていた。一瞬、昔からそうして

いたかのような錯覚に捕らわれそうになった。

「闇よ、彼の者を縛れ『バインド』!!!」

私が唱えた後、ゴブリンの足下に黒い魔法陣が浮かんでそこから出てきた黒い触手状の物がゴブリン達を絡めて縛る。

ラグは驚いて私の方を見ていたけれど、折角のチャンス逃すまいとゴブリン達を目掛けて駆ける。

ゴブリン達の間を縫って行きながら横風に長剣を振っていく。ラグが通り過ぎた傍から鮮血が飛ぶ。次々とゴブリン達の奇怪な断末魔が上がる。

近くで見えていて吐き気がした。私にとっての非日常が今、目の前で起こっていて、これからこの光景が日常になるんだと思うと少し悲しくなった。

私が向こうの世界で生きていることになっていいのかどうかも分からないし、その前にこの世界から帰れるかも分からない。だとしたら、私は……。

向こうにいたときの自分にサヨナラをするつもりも含めて、一つの魔法を詠唱する。

「燃え盛る槍よ、彼の者を貫き焼き尽くせ『フレイムランス』!!!」

空中に出現した赤い魔法陣から槍の形をした炎がラグに切られて倒れているゴブリンに向かって降り注いだ。さっきのような断末魔は聞こえ無かったけど、肉の焼ける気持ち悪い匂いが鼻を刺激した。さっきまで戦っていた敵と共に昔の私が燃えているような気がした。

長剣についた血を振り払って鞘に収めたラグがこちらに向かって歩いてくる。ラグは凄く難しい顔をしていた。多分、『フレイムランス』を使った意味を理解したのかもしれない。あるいは、私が凄

く打かない顔をしていたのかもしれない。

「……………行けるか？」

ラグはただ一言言ったただけだった。

「うん……………」

どこか暗い返事をしたときだった。

ガバツ！！

ラグが私の腕を掴んだかと思ったら、気づいた時には視界が真っ暗だった。少し経ってラグに抱きしめられているのを理解する。

「泣きたい時は我慢しねえで泣けよ。全部、俺が受け止めてやるから」

その言葉が嬉しかったのか、私の目から涙が一筋零れる。それが引き金になって涙はどっと溢れてきた。

ラグは私が泣き止むまでずっと抱きしめていてくれた。

第十一話 この世界に来て初めて歌を歌いました。(前書き)

やっと、「恋歌」に繋がる部分出てきました！
()

第十一話 この世界に来て初めて歌を歌いました。

森の開けた所で今日は野宿をすることになった。なんだかんだ言
つて、結局は私のせいで今日中に王都に着けなかった。私が泣き止
むまでラグはつき合ってくれたんだもん。凄く感謝してる。

今日の夕食は携帯食の干し肉とパンだった。固くて美味しいとは
言えないけれど、背に腹は代えられない。

「悪いな。こんな物しか無くて。リコリスの分だけ何か美味しい物買
っとけば良かったな」

「そんなことないよ！私の分まで用意してもらって何か申し訳ない
って思う」

そう言って笑うと、「そっか」って言ってラグも笑ってくれた。
食事も終わって二人で寄り添って夜空を見ていたら、頭の中で詩
が出来上がっていた。

高校では軽音部に入っていたから、オリジナルの歌をよく友達と
作ってたなあ。私が詩を書いて、他の子達が曲を付けて……………。

そんな事を思い出しながらラグに買って貰ったノートとペンを取
り出して浮かんだ詩をサラサラと書いていく。

隣でラグが不思議そうにこっちを見ている。

「リコリス、何書いてんだ？」

「ん？ヒミツー！」

私がちよつと意地悪したら、ラグはそのまま拗ねてしまった。失
礼かもしれないけれど、ラグって拗ねると可愛い！！

ちよつと笑いを零してまた詩を書き始める。もちろん、日本語だ

からラグは読めない。だから、さつきから「何書いてんだ？」「ヒミツ！」のやり取りばかりしてた。

三十分ぐらいで詩は出来あがった。もちろん、メロディーはもう考えてある。

私はこの森の美味しい空気をいっぱい吸って今できたばかりの歌を歌い始める。

） 幼い僕が喧嘩したあの日

頭を撫でたその手の平が

「ごめんね」と伝えてきた

帰りたいたいと思っていても

帰れないと分かっているから

「今」を生きてこう、

自分らしく

どんな辛い事があつたとしても

「今」を生きてこう、

後悔しないように

だって今は「お帰り」って

言ってくれる人がいるから

歌い終わって、ラグの方を見る。

ラグはそつと瞳を閉じて心地良さそうに聞いていたみたい。目を瞑っている横顔もなんだか綺麗だった。美男イケメンは何をしても格好いいんだと思うとなんだか平凡顔の自分が悲しくなってきた。

瞼が持ち上げられ、露わになった翠の瞳が私を捉える。

捉えられた瞬間、ドクドクという音が聞こえてきた。ラグから顔

を逸らせられないのは何で？

私が体験したことも無い事に混乱している時、先に沈黙を破ったのはラグだった。

「もしかして、さっき書いていたのはそれか？」

「う、うん」

ラグの質問を答えてやっと、視線を逸らす事ができた。それと同じに高鳴っていた鼓動もだんだんと収まる。

隣から楽しそうな声が聞こえてきた。

「お前の歌声って心地いいな。また今度、聞かせてくれないか？」

驚いてラグの方を見たけれど、最後の一言が凄く嬉しくて蔓延の笑みで頷いた。

「うん、もちろんだよ！」

微笑ましそうに私を見てたラグは、私の肩をだいて引き寄せると反対の手で私の頭を撫でた。

「ああ、約束だぞ。今日はもう遅いから寝ろよ」

「分かった。お休み、ラグ」

「ああ、お休み。リコリス」

そういうやり取りをした後、ラグの肩に頭を乗せて目を閉じた。明日の王都、楽しみだな。

第十一話 この世界に来て初めて歌を歌いました。（後書き）

作中でリコリスが歌った歌の詩は作者のオリジナルです。

活動報告にフルバージョンの歌詞を掲載しますので、興味がある方はぜひのぞいて見て下さい！

第十二話 隣のアイツは騎士でした。

私達が王都フアーランドについたのは昼すぎだった。

王都はとても綺麗で華やかかつ賑やかだった。街は赤茶色の髪
の青年が主人公の某RPGの王都みたいで、中世ヨーロッパ風のお城
に色とりどりのレンガの家、広場は綺麗に整えられていて街全体が
一つの芸術品みたいだった。

「すっごーい！綺麗……」

「な、綺麗だろ？」

街に見とれていた私をラグは微笑ましい物見るように見ていた。

そんなラグの顔を見てちょっと私の眉間にしわが寄る。ついでのよ
うに羞恥で顔が熱くなったのは言うまでもない。

「何こっち見てるの？恥ずかしいから見ないでよ！」

「悪い悪い。つい…な」

そう言っつて、ラグは笑ったけどちょっと照れてるみたい。この数
日で分かったけど、ラグって照れると自分の頭をかく癖がある。今
だって、頭をかいてるもん。

「ラグ、行こう！」

ラグに手を差し出す。ラグはちょっと躊躇ったけれど、そっと微
笑んで

「ああ、行こうか」

私の手をとった。

|||||

私は只今、一人で街を散策中です。

本当はラグについて行きたかったけど、大事な用事だから駄目って言われちゃった。その代わり、明日傭兵ギルドに連れて行ってくれるって！これで仕事ができたら万々歳だよ！人に頼ってばかりの駄目人間にならなくて済むんだよね！

やっと仕事ができると思うと凄くテンションが上がった。明日が楽しみ！

上機嫌にスキップしながら色々なお店を見て回った。

菓子屋や装飾品屋に本屋とか…。兎に角色々見て回った。欲しい物は沢山あったけど、いつもの癖で色んな所を見てから一番安い物を買ってしまう。

まあ、高校生ってお金使って友達と遊びに行きたい時期だから、いっつも金欠なのよね。こういう事するのも高校生ライフが関係してるんじゃないかな？

それよりも、別れ際のラグが可笑しかった。「無駄遣いするなよ！」とか、「知らない人にはついて行くな！」とか、「変な奴に捕まりそうになったら兎に角逃げろ」とか、何か凄く過保護だった。正直、どうにかしてってくらしい。

売り物を見てファージよりも物価が高いなと思ってたら、聞き覚えのある声があった。

「高梨！」

聞き覚えはあった気がしたけど、私の事を呼んでなかったみたい

なのでもちろん無視。

「高梨!!」

どんだん声がかつちに近づいて来ているような気がするけど、リリスという私の名前を呼ばれてないのでやっぱり無視。

「高梨、無視すんじゃないよー!」

「高梨って誰…って、え!?!」

声の主は私の肩を強引に引つ張った。

私は高梨なんて名前じゃないから人違いだつて訴えてやろうと思っただけど、相手の顔を見たらそれも言えなくなった。

だつて、目の前にいるのは…

「ルキア…?」

「それ以外誰がいるんだよ」

目の前にいる黒髪の青年は、高校で私の隣の席にいた天城ルキア（アマギルキア）だったのだから。

「それよりも、何でシカトしたんだよ?」

「え!?!私の事呼んでたの?」

あくまでも私は名前を覚えていないから、自分の事を呼ばれても私の事だと分からない。

ルキアは名探偵みたいに左手を顎にあてて考え込んだ。

その後、私の腕を掴むとそのままスタスタと何処かへ行こうとする。

「え！？どこ行くの？」

ルキアは何も言わずに私を引っ張って行った。

|||||

「へえ、じゃあ今はリコリスって名乗っているのか」

「うん、そう。自分が呼ばれてたなんて思ってたの。ごめんね」

ルキアに連れて来られたのは喫茶店だった。場所を移したかったらしい。ちゃんとやってくればいいのに。

ルキアは二年前に私みたいに遥に突き落とされてここに来たんだって。で、遥からの課題（後日発表）をクリアすれば自由にこつちとあつちの世界を行き来できるらしい。ちなみにルキアはこの国の騎士団長なんだって！…凄い。

さつきルキアが言ってた高梨はお察しの通り私の名字です。久しぶりのクラスメイトとの世間話で盛り上がっていたら、過保護なあの方の声がしました。

「リコリス、こんな所でな…」

「ラグ？どうしたの？」

ラグは私の後ろを見て、固まった。

「こんな所に何の用だ？『紅蓮』のラグ」

「それはこつちの台詞だ。俺んとこのリコリス連れて何してんだ？」

『氷刃』ルキア

えっと、ラグとルキアは知り合いなの？それとなんだか二人が怖い。

このままだと、私に死亡フラグが立ちそうなので店からそっと退散させていただきました。

第十二話 隣のアイツは騎士でした。(後書き)

新キャラクター登場です！

タイトルの『隣のアイツ』は隣の席のアイツって意味でした。

ルキアの他にもあと三人はリコリス達の世界からのトリッパーを登場させようかと考えています。

『紅蓮』VS『氷刃』えっと、二つ名って何ですか？(前書き)

読み辛かったらごめんなさいm) | | (m

『紅蓮』VS『氷刃』えっと、二つ名って何ですか？

喫茶店から出て離れると、喫茶店から二人が飛び出して来た。

通りまで出てくるとラグは長剣をルキアは刀を抜いた。…って刀あるの！？

嫌な予感がしたから、とりあえず周りに被害が出ないように結界を張る事にする。

「空間を切断せよ『ゲージ』！」

ドーム状の幕が私達三人の回りを覆う。結界張るのって辛い。これだけで結構疲れた。

対峙してる二人はそれぞれの武器に魔力を込めた。

『凍てつけ！！』

『燃えろ！！』

詠唱すると二人の武器に変化が表れる。ルキアの刀は白銀の氷を纏い、ラグの長剣は紅い炎を纏っていた。

何の合図も無く二人が動き出す。

―突いて

捌いて―

下段からの切りかかり―

―跳躍して空中へ

―一回転して

―上段からの切り落とし

受け止めて―

―お互いの魔力がぶつかり合い

二人の間で火花が飛び散る―

弾き飛ばして―

一足で間合いを詰める―

私は二人の闘いに見とれていた。隙の無い攻撃にしなやかな動作…。まるで二頭の聖獣が舞い踊っているようで、一瞬一瞬に目が離せない。

何時もは過保護なアイツと隣の席だったアイツがこんなにレベルが高いだなんて思ってたなくて、今の二人と私は違う次元にいるような錯覚すら覚えそうだった。

って、あれ？待てよ、確かコイツ等って決闘じゃなくて喧嘩してんだよね？と言うことは……。止めないといけないんじゃない！そのことに気づいて慌てて詠唱する。

「闇よ、彼の者を縛れ『バインド』！！」

ラグ達の足下に黒い魔法陣が出現してそこから出てきた黒い触手が彼等の手足に絡まる。もちろん、二人は身動きがとれなくなる。

「おい！高梨、何すんだよ！」

「リコリス、何で俺まで！？」

いきなり縛られて状況を把握できてない二人に、溜め息を吐きながら説明する。

「喧嘩だけで剣を抜くなんて本当に二人共馬鹿！？オマケに魔力まで使って……。私が境界張って空間を切り離さなかつたら、街に被害が出てたかも知れないのよ！特にルキアは騎士団長なんだからその辺気をつけなさいよ」

お説教をされて二人共うなだれている。反省はしているようだったから『バインド』を解いてあげて二人を見た。

「いい？もう馬鹿な真似はしないでね」

今度は優しく言う。二人も弟がいるみたいでちょっと面白かった。

「はい……………」

二人揃って返事する。うん、揃つてるとなんだか気持ちいい！

結界を解いてさっきまでとは別の喫茶店に入る。だって、さっきの喧嘩の後で同じ店に入れる訳ないじゃん。

店に入って席についてすぐ、疑問を二人にぶつけてみた。

「ねえ、ラグの『紅蓮』とか、ルキアの『氷刃』って何？」

私の疑問に答えてくれたのはラグだった。

「二つ名って言って、歴戦の戦士達に与えられたあだ名みたいなものかな？二つ名はその人の特徴に合わせられる。俺なら髪の色と得意な魔法から、その阿呆騎士は戦闘スタイルから付けられんだ。ちなみに、傭兵や騎士にとって二つ名を持つ事は一種のステータスだから、持てるようにみんな努力してんだ」

私は納得した。ニコニコしているラグに対してルキアは額に青筋がたっているような気がするけどあえてそこはスルーした。

怒りを露わにしないのは成長した証しか？

「それにしても、高梨の魔法は凄いな。流石、賢帝シオンの妹だな。兄貴も兄貴なら、妹も妹だな」

ルキアの問題発言、いや、通りこして爆弾発言で私もラグも固まった。

どうやら兄、高梨紫苑タカナシシオンも遙によってこちらに飛ばされていたようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1362y/>

彼岸花の恋歌

2011年11月18日05時37分発行